西荻教会　ペンテコステ講筵

バプテスマ
――マルコ伝第1章4～8節――

1978年5月7日
小池辰雄

回心のバプテスマ　水は低きに流れ去る　第二の宗教改革　聖書はドラマ　神の根源語　霊止一対一が拝一神　力ある者　我執が罪　在りて在らしむる者　十字架のバプテスマ　無者キリスト　南無キリスト　坐禅和讃　十字架という門　佐久間象山　御霊の力　聖霊が来ているか一如の世界　また来る朝も食うキリスト　饑じくもなしこの日暮れ　福音書は生きものだ

【マルコ1・4～8】

4バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣伝う。5ユダヤ全国またエルサレムの人々、みな其の許に出で来りて罪を言いあらわし、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり。6ヨハネは駱駝の毛織を著、腰に皮の帯して、蝗と野蜜を食えり。7かれ宣伝えて言う『我よりも力ある者、わが後に来る。我は屈みて、その靴の紐をとくにも足らず、8我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを施さん』

●回心のバプテスマ

人生には大事なひと時がありますが、今日が皆さんにとって、そういった掛け替えのない一つの時であるということになっていただきたいと、私も念願しております。

「バプテスマ」という題を掲げさせていただいたわけですが、ギリシヤ語では「バプティスマ」ですけれども、「バプティゾー」という字は「浸す」という意味です。水の中に浸す。それは潔めのためであることは、東西のいろんな宗教において共通の現象です。

ご承知のとおり、洗礼のヨハネがヨルダン川でバプテスマを施すためにやってきた。旧約の方では、水の潔めは、レビ記15章、民数紀略19章、特に列王記略下の5章に有名なお話がありますが。マルコ伝の1章4節に、

4バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣伝う。

とある。「悔改め」は、ご承知のとおり、心の、魂の方向転換ということなんです。日本語の「悔改め」という訳はあまり感心しません。心を回らす、むしろ「回心」といった方が

いい。回心のバプテスマです。

●水は低きに流れ去る

みんな方々からやって来まして、このヨルダンでもってバプテスマを受ける。

「ヨルダン」

というのは「ヤルデーン」と言いまして、これは「下(くだ)る」という意味なんです。流れが下る。

「下るもの」

という本当は普通名詞みたいなものです。

漢字の「法」という字は「三水に去る」と書きますね。水が低きに流れ去る。それが「ヨルダン」なんです。だから、「ヨルダン」「ヤルデーン」という字は漢字でいうと「法」に当たる。

漢民族は素晴らしいと私は思う。私は漢字が世界最高の文字だと思っていますから。どうぞ、若い方は大いに漢字を勉強してください。漢字制限なんてとんでもない話です。

水が低きに流れ去るのを自然界の法則という。そこに「法」という字が出来た。自然界にも法則がある。人間界にも道徳の法則がある。カントの「実践理性批判」の有名な言葉があるとおりです。

「これを思えば思うほど、またしばしばこれを考えれば考えるほど、驚嘆する二つのものがある。それはわが頭上の星辰(せいしん)の空と、わが内なる道徳の法である。」

と彼は言った。即ち、自然界の法則と人間の心の中の道徳の法則に、カントは限りない畏敬の念を持つという。ああいうカントの言葉を読んで、今の青年が感激しないとすると、私は本当に情けないと思う。日本はこのまま行ったら、もう精神的には滅亡ですね。

●第二の宗教改革

こないだ、ドイツから帰ってきた人の話を聞きました。世界の先進国のこれからの将来をいろいろグラフに表したところが、日本のカーブはずーっと下へさがっていく。ドイツはむしろ多少、並行してから上昇するようなカーブである、というようなことを言ってました。さもありなんと思った。けれども、キリスト教国でも決してそう楽観はできない。私はドイツへ17年前に行きまして、あそこのルター教会に一年間通ったんですけれども、どうも、ルターのプロテスタンティズムがだいぶ観念化してしまっている。副牧師が私に

「聖書の時間をもってくれ」

と言うので、数回やりました。牧師さんが

「なぜ、そういう気持になったか」

と聞きましたので、

「私は天から聖霊のバプテスマを受けたからだ」

と、はっきり言いました。向こうの教会誌にも書いてやった。それくらい――ドイツの教

会を全部は知りませんよ、なかには「フライゲマインデ」という自由な教会がありまして、そこにはなかなか深い方々がいらっしゃるようですけれども。世界中どこにも隠れた存在はもちろんあります――今、第二の宗教改革をあなた方自身がしなければならないぎりぎりのところに来ている。そう思います。

そういうことで、是非とも聖書の次元に立ち返らなければならない。やれ

「カトリックだ、プロテスタントだ、何々教会だ」

なんて、そんなことを品定めすることはない。キリスト直結、使徒たちと同じようにキリストに直結する。そういったところに我々は戻らなかったら、天界でパウロや使徒たちが嘆いていると思います。

福音の掴(つか)み方、説き方はいろいろでいいです。また、礼拝の仕方もいろいろでいい。どうせ、人間は相対的存在ですから、それぞれの特殊性が出るのはやむを得ない。また、あって結構です。あって然るべきなんです。パウロはパウロ、ペテロはペテロ、ヨハネはヨハネ、ヤコブはヤコブ。それぞれみんな色調が違う。ただし、彼らは一つの同じものをもっていた。それは聖霊である。その点だけははっきりしてもらいたいというわけです。

太陽の光は無色透明ですが、それが水滴に当たると、我々が眺めるあの虹が出てくる。無限の色をそれはもっているわけです。無色なものが無限色をもっている。

今日は会堂創立八周年記念会というお話ですが、私は「八」の字を見ていたら、八の字は富士山みたいな恰好をしている。また、ひっくり返すと、これは無限に広がっていく。また、数字の「8」が平伏すと、「∞」（無限大）という字になる。あなた方は、今日は会堂無限大記念会とお思いになってもいいじゃないですか。

聖霊の世界というのは、概念で限定なんかできる世界ではない。日本人は本来そういうことに対する感覚をもっていたはずなんだけれども、何か非常に全てが限定的になり、分析的になってしまった。たとえば、茶道、弓道、柔道、剣道、みんなこれは「道」の世界です。「道」は、身につけた真理が道なので、身につかないものは本当の道ではない。日本人は本来そういう道の民であるのに、なぜ、道ということを本当にもう一遍自覚し直さないか。情けないですね、正直。

私は学校で教育をやってますけれども、小学校から大学に至るまで、先生が落第だよな。それだから、今は、若い人たちの間にいろんなおもしろくない現象が出ている。その責任は我々先生にある。教育にある。教育の根底は宗教でなければダメなんです。教育者が宗教心をもたなかったら、教育なんか本当はできない。私は全国高等学校長会議ではっきりこのことを言うんですよ。おそらく、

「あの校長は変わり者だ」

ということになっているでしょう。真理を本当に告白するのに、何も遠慮は要らない。文部省の役人がいたって、一向差し支えない。悪ければ、いつでも辞める気で話します。

●聖書はドラマ

皆さん、聖書は、これは研究する本ではないですよ。聖書は、日蓮の言葉を借りれば、身読する本です。身体（からだ）で読む本。「身読（しんどく）」とか、「色読（しきどく）」といいます。具体的に読む、全存在で読むことです。先程、S先生が聖書を読みました。私は聖書を見ない。聞いているんです。ということは、本当は聖書は読む本ではない。仕方がないから読みますけれども。読みながら聴いていなければダメです。読みながら本当に天来の声として今聴いていなかったならば、これは頭で読んでいることになる。聖書に対する態度は、今の一般のキリスト教は変えなくてはいかん。

聴くんです。また、キリストに、神さまに捕まえられる。引っ張り回されるんです。観念の、頭のクリスチャンが非常に多い。これはどんなに聖書を研究し、ギリシヤ語をやり、ヘブライ語をやったってダメですよ。この日本語の聖書でも、眼光紙背に徹するというが、奥から響いてくる響きが読めなければ、響きが聴こえなければダメです。

だから、

「聖書はドラマだ」

と私は言うんです。劇だと。もったいぶってはダメですよ、これは。あらゆる現実がこの中に入っている。絶対界から、どうにもならない相対界に対して光が臨んでいる。救いの手がのびている。そういう非常に多次元的なドラマの本ですから。シェークスピアだって、聖書にはかなわんですよ。なぜ、

「聖書は世界最大のドラマである」

と言わないか。どんな文学だって、みんな聖書の影響を受けている。大体、ヨーロッパ文化を受けようとして、それでいて、聖書を読まない大学の先生がたくさんいるわけだ。

『求めよ、さらば与えられん』なんて、小池さん、どこにあるんだね」

なんて。まぁ、そんな調子でね。

どうぞ、皆さんはこれをドラマとして読んでくださいよ。そして、ドラマを見物するのではない。ドラマだから、その中に自分が活劇中の一人物となって読む。そうしたら、読めなくなる。これは聴かなければダメなんです。捕まえられなければダメなんです。引っ張り回されなければならなくなる。そうして、

「降参しました！」

ということになる。降参したら、この世界に入れる。降参するまでは、聖書というのは

「分かったの、分からないの」

なんて、そんなことではないんです。

そうしたら、皆さん、うれしくなったですか。

「聖書は最大のドラマだ。よし、これから毎日、この聖書を読んでやる。もうシェークスピアはやめた」

と。聖書を読んでから、シェークスピアを読んでください。そうしたら、シェークスピアだって、ゲーテだって、ダンテだって、ドストエフスキーだって、みんな分かってしまうから。本当ですよ。ああいうものを書けと言われても、それはなかなか才能がなければ書けない。けれども、彼らに決して驚嘆することなしに、

「なるほど聖書の光で読めば、何でもこれはつかめるなぁ、限界が分かるな、更に
　それをのばすこともできるな」

という、不思議なことになる。私みたいなこんな劣等生が――私は高等学校を受けるときに一遍一浪したもの。どうか、一浪の人は大いに自信をもってください――とにかく、私は聖霊を受けてしまったら、楽しくてしょうがない。楽でしょうがない。いわゆる研究なんて、しゃっちょこばったことは嫌になってしまう。もちろん、私もギリシヤ語やヘブライ語を勉強しますよ。けれども、そんなことに囚われなくなる。有っても無くても、どうでもいいんだ、そんなものは。キリストが

「お前たち、この旧約聖書を研究しろ」

と、どこかで言われましたか。キリストは、パウロもそうだけれども、旧約聖書の文句を引用するときに、勝手な解釈の仕方もやっている。その時に示された通りに。ホセア書の言葉なんて、逆にとったり。

そういうことでね、どうぞ、聖書の読み方はそんなもんだと。皆さんは、全存在で聴いていらっしゃるでしょうね。そして、新しくひとつやってくださいよ。この教会はＳ先生を先頭にもの凄いことになっていただきたい。

●神の根源語

洗礼のヨハネはバプテスマをやっているんだけれども、預言者の最後の者ですよね。ところが、彼が何と言ったかというと、７節に、

**7かれ宣伝えて言う『我よりも力ある者、わが後に来る。我は屈(かが)みて、その
　靴の紐(ひも)をとくにも足らず、**

あの人はてんで次元が違う、桁が違うんだと。桁違いだということです。

**8我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを
　施さん』**

私は古い人間だから、文語訳聖書で読んでいる。口語訳で、何とか「であろう」なんて、よく書いてある。あれはギリシヤ語の未来形を「であろう」と日本語では訳すんでしょうね。けれども、「であろう」と読んでいると、

「そうかも知れない。そんなことであろう」

なんて、何か蓋然性(がいぜん)の気がしてしまう。「であろう」なんて読んでいてはダメですよ。そう書いてあったって、その

「であろう」
の奥に、
「である」
とはっきり断定的に読んでください。
「儀文は殺し、霊は活かす」
とパウロが言った。即ち、文字にとらわれたらダメです、文字の奥の本当の響きを受けとっていかないと。大体、キリストやヨハネはギリシヤ語でものを言っていたのではない。アラミ語なんだ。果たしてギリシヤ語が本当にアラミ語を伝えているかも問題なんです。
何語でもいいですよ。神の根源語というのがある。神の根源語がいろんな言葉を通して言っているだけのはなしです。その根源語が読めるためには、聖霊が来ないと読めないんです。
マタイ伝の方には
「聖霊と火でバプテスマする」
と書いてある。そうするとすぐ、
「どう違うんだろうか」
と思うでしょ。どうも違いやしない。「聖霊と火」という言い方をしても、これは、
「聖霊は火であり、火は聖霊である」
ということなんです。

●霊止

「地水火風」と申しますね。
「風は何処(いずこ)より来りて何処に行くかを知らざるが如し」
なんて、キリストが言われた。これはギリシヤ語もヘブライ語もそうなんだけれども、霊も風も気も、これはみんな同じ字です。
それから、聖霊は水に例えられている。ヨハネ伝４章にサマリヤの女との有名なところがある。あそこのところをサマリヤの女になって読んでくださいよ。キリストは、
「活ける水が汝の腹から湧き出(い)でるぞ」
と、不思議なことを仰った。
水といえば、人間の身体は90何％は水分です。だから、水に例えられたら、人間はそもそも霊的なものなんだ。
『ウパニシャット』という本に、
「眼は火である」
という。眼光炯々(けいけい)として、パウロだのキリストなんていうのは光っていたと思うね。これは内側からの霊の光です。

体は水。それから、風は何か。鼻から出入りする息、気。地は足。天、空は頭。頭が本当は一番霊的なところです。ところが、この霊的な頭が、すっかりいわゆる頭になってしまった。

「頭がいい」

なんて。頭がいいのが霊がいいなんて誰も思わない。そういう言葉になってしまった。

大体、「ひと」というのは「霊止」――霊が止まる――と書く。大言海に書いてある。昔の人は、神霊が止まっているのを霊止と言った。受霊と言うでしょ。霊を受けることを受霊と言った。だから、霊が止まる霊止ということです。

「われ汝のうちに。汝わがうちにとどまれ」

とヨハネ伝14章、15章あたりに出ているでしょ。15章の葡萄の樹の譬えに。「メネイン」というギリシヤ語が「止まる」とか「宿る」という言葉です。

神霊が宿っているのを霊止というんだが、さぁ、それでは一体、本当の霊止はどこに歩いているだろうかと。ソクラテスではないけれども、捜しまわりたくなる。どうぞ、皆さんは本当の意味で霊止になってください。

だから、「ひと」と書くときは、あの「人」という簡単な字は書かないで、「霊止」と書いた方がいい。書いているうちに、だんだん霊感してくる。まぁ、わざわざそうしませんけれども、それくらいの気持でいてくださいよね。

私たちは本来、霊が止まっている。

「神の似姿に造られている」

と、創世記にあるでしょ。「似姿」というのは本質的に同質（ホムウジオス）なこと。同質に造られている。本来は神と同質です。仏教の方でもそうですよ。

「衆生悉く仏性あり」

と道元が言ったでしょ。「仏性」と言おうが、「神（キリスト）性」と言おうが、いいですよ。最高の実在者は、こちら側から限定されるようなものではないんだから。最高の実在者はわからない。不可思議ですよ。もし分かったら、それはうそだ。自然科学的な頭でもって、あるいは哲学的な頭で神を説明したって、そんな神さまは一人の人も救うわけにいかない。

●一対一が拝一神

分からない神さまを分からしたのは誰ですか。イエス・キリストです。

「我を見し者は父を見しなり。我と父とは一つなり」

と仰った。私は、これは大好きな言葉なんです。

「私を見た者はお父さんを見たんだ」

と。

「では、『お父さん』とはどういうものなんですか」

なんて、すぐ神話的に考える。そうじゃないですよ。霊的な、本当に全存在をもって信頼し、それにおいて生きている、その実在をキリストは

「父」「アッバー」

と言われた。

聖書は偶像を造らない。実に人間的な表現をしながら、決して偶像ではない。人格的にして霊的です。「モーセの十誡」がそうなんです。あれは本当は、「モーセの十言」と言う。十の言葉です。

「わが顔の前には、汝にとって他の神々はあるまじきものぞ」

と。これが第一言の本当の意味です。

「他の民族には他の神々があるだろうけれども、私の前には、私だけがお前の神さまだよ」

というのが、一対一が拝一神の世界です。これが人格的関係です。

皆さんは、いろいろたくさんいらっしゃる。甲の人が、乙と丙とを比較したら、人格的に扱っていない。人格的に人に交わるというのは、みなそれぞれ絶対性をもっている。比較してはいかん。

では、絶対性はどうして出るかというと、三角垂体、「幕屋」ということを言いだしたのは私なんですけれども、聖書には「幕屋」が創世記から黙示録まで出ています。

三角垂体の頂点（G＝神・キリスト）から底面の各頂点（A、B、Cの各人）を結んだ線、GA、GB、GCという線、この直接の線が引かれていなければダメです。大黒柱（頂点Gから底面ABCへ下ろした垂線）はキリストです。まん中にキリストという十字架の大黒柱が立っている。そういう神・キリストとの直接関係において絶対性を頂いているんです。相対でありながら絶対性を頂いている。それが本当の人格なんです。

すぐ、「合同」とか言うけれども、ちっとも分かっていない。私は、今の民主主義なんてものは嫌だよ。「民主主義」という言葉が非常に災いになっている。身勝手主義だね、今の民主主義なんてものは。まず、カントや何かの道徳哲学からしっかり勉強しなければいかん。カントでもゲーテでも何でも、みんなマルチン・ルターから来てますからね。ルターはパウロから来てます。

だから、聖書に、パウロさんに戻らなければ。パウロはキリストから来ている。もう、はっきりしているんですよ。そういうことを本当に自覚してもらわなければ困るんだ。

……何の話からこうなってしまったかな。そういうように、私たちは上からずっと来ている。まぁ、だんだん入っていきますから、どうぞ、ご心配なく（笑）。私の話は決してノートにとれませんから。これはドラマですから。非常に劇的に展開していきます（笑）。私は、昔はちゃんと原稿を作って話したものだ。いろいろなものがノートに書いてある。私はこうやって机の上に並べるけれども、そんなものは並べたってダメだよ。ノートにとらわれ

たら、生命がなくなるから。

●力ある者

１章７節に、

7 かれ宣伝(のべつた)えて言う『我よりも力ある者、わが後に来る。我は屈(かが)みて、その靴の紐(ひも)をとくにも足らず、

「力ある者」とある。「力」とは一体何ですか。名前でよく、「…エール」という。「イスラエール」なんて。ヤコブは神の使いと相撲(すもう)をとって負けた。腿(もも)のつがいをはずされた。

「神勝ち給う、神支配し給う」

というのが

「イスラエール」

という意味です。

「神にうち勝たれたる者」

これが「イスラエール」です。「エール」とは「力ある者」という意味です。神さまは力ある者。

「では、腕力か、武力か」

なんて、そうじゃありません。人を救う力ある者です。人を救う力は霊的な愛なんです。霊的な愛が最大の力をもっている。

「アモール　オムニア　ヴィンキット」（愛は一切に勝つ）

という。これはヒルティーが大好きな言葉で、彼の墓碑銘に書いてあるそうです。「愛は一切に勝つ」とは、一切を救い上げるということですよ。愛が勝つとは、相手を救い上げるということ。

「敵をも愛せよ」

というのは、

「敵をも救い上げろ」

ということです。感情的に愛せよということではない。

「この野郎！」

と思ったっていい。この野郎という奴を救い上げてしまうんだ。その力は聖霊でなければダメなんです、キリストの霊でなければ。まぁ、聖霊のことは、もう少したってから言いましょう。

●我執が罪

8 我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを施さん』

ヨハネは、「私は水でバプテスマを施す」と言うが、洗礼のヨハネが本当に水において霊を知っていればよかったんだけれども、そうはいかなかったからね。まぁ、いわゆる潔めだよな。水でいくら潔めて洗ったって、

「**殺人の手の臭いはアラビアの香油もこれを消すことができない**」

と聖書にも書いてあるよ。何で洗ったってダメだよ、人間は。キリストの血で洗わないことにはどうにもならない、この我執というやつは。我執が「罪」なんだから。我（が）というやつ。エゴイズム。エゴというやつ。

「我思うゆえに我あり」

なんて、とんでもない。ちっとも在りはしない。デカルトは大間違いした。あれで近代人は自意識過剰になってしまった。シュバイツァーさんも、「あれはけしからん」と言っている。

「我はキリストに愛されている。ゆえに我あり」

ならまだ分かっている。

「主われを愛す。主は強ければ」

という、あの幼稚園の日曜学校の讃美歌。あれは讃美歌のアルファでオメガです。最初と終りです。釣りの最初で終りはフナ釣りだという。

「**我は始めにして終りなり**」

というのは、そういうことなんです。また、民謡は音楽の始めで終りですよ。大交響楽があっても、民謡が始めで終り。我々のハートにうったえるものは民謡なんです。一番単純なもの、そして、より深いものです。

日本の国旗は世界最高の国旗です。太陽です。太陽は大変なもんだ。どうして、この日本の国旗に対して驚嘆しないんだろうね。国旗なんてのは、オリンピックで揚げるものかと思っている。国歌なんてものもそうだと。とんでもないはなしだ。

「君が代（よ）は千代（ちよ）に八千代（や）に」

という。私はあれを歌うときは、キリストのことを思っている。

内村先生が

「私は二つのJを愛する。それはジャパン（日本）とジーザス（イエス）だ」

と言った。本当にキリストに在る者は本当に日本の愛国者になるはずです。

●在りて在らしむる者

太陽は素晴らしいですね。

「**我は在りて在る者なり**」

という、モーセに言われた言葉がある。けれども、「我は在りて在る者」だけであったってしょうがない。

今から何年前になるだろうね、夏の終りの頃に、西の方に雲がかかって、太陽が沈む時

にスーッと光が射しているのを見て、私はハッと思った。

「あぁ、あの光でもって、地上の生きとし生けるものはあの光熱でもって生かされている。見えないところのもの凄い引力で引っ張り回されている。地球は太陽に対して絶対依存の存在だ。そのように、私たちは神に絶対依存の存在だ」

と。このことに気がついただけで、もう、信仰の世界はもの凄くなる。気がつけばいいんですよ、気がつけば。信はもう身近に来ているんですから。道は近きにありです。気がつくことです。大体、偉い人は――私は偉くないけれども――偉い人というのは、単純なことに驚くんです。ニュートンだってそうだ。リンゴが落ちるのを見て、

「あぁ、引力だ」

と。

それで、あの言葉は、

「我は在りて在らしむる者なり」

と、私は訳すんです。ユダヤ語の文法では少し無理な点もあるでしょう。けれども、「我は在りて在らしむる者なり」と。本当は、モーセに言われた神さまの心はそうである。

「私が在ることは、お前を在らしめている。お前が信じようが、信じまいが、無神論であろうが、お前は在らしめられているんだよ」

と。そのことに気がついたら、ぶっ倒れますよ。

「すみませんでした！」

と。「信仰」とは何でもないんですよ。

「分からないけれども、まぁ、信じておこう」

なんて、そんなものはひとつも信仰ではない。ぶっ倒れなければ、

「参りました！」

と言わなければ、本当の信の世界には入れない。

●十字架のバプテスマ

そこで、今日はペンテコステを向かえているわけですけれども。降誕節（クリスマス）と復活節（イースター）と聖霊降臨節（ペンテコステ）は三大節です。

復活節の前に大事な十字架の金曜日がある。それを忘れてはいかん。本当は三大節ではない。四大節なんだ。キリストの降誕と十字架（ゴルゴタ）と復活と聖霊降臨。そして、最後は再臨となる。

どうですか。ペテロもヨハネもヤコブも――あの三人が三弟子だった――キリストと一緒にしょっちゅういたわけです。ときには、キリストに按手してもらって、霊の力が来たよ。けれども、それは一時的なことでおしまい。知っているんですよ、キリストは

「やがて、お前たちはみんな、羊飼いを去る羊みたいに、私から去って散ってしまう。

けれども、今に私はお前たちにもう一遍会うぞ。本当に会うぞ。本当に会うときは、今こうやって一緒にご飯を食べているよりかもっと本当の在り方をするぞ」というわけです。その先を見ている。だから、

「祈って待っていろ。だけれども、私はその前に、受くべきバプテスマがある」

とキリストが言われた。キリストが受くべきバプテスマというのは十字架のことです。キリストはヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けました。ヨハネは、

「あなたみたいな人は私からバプテスマを受ける人ではありませんよ」

と言った。本当はその通りなんです。けれども、彼は私たちと同じ弱さをもっている。人間の弱さをもっている。サタンに、ヘタすればやっつけられる。そういう危機的存在なんです。彼はとにかく、回心する必要はなかったけれども、我々のどん底に立って、水のバプテスマを受けられました。回心のバプテスマです。キリストはいつも私たちの場に来てくださる。そして、しかも、どん底に立ってくださる。これが担いの姿勢なんです。そうして、水から上がってきたら、今度は、聖霊が天から降ってきて、

「われ汝を悦ぶ、汝はわが愛しむ子なり」

と。神さまの悦びはどういうところに現れたかというと、本当に神の前に平伏して、そして御霊を受けたところに、神さまの悦びが来た。これは決定的なことです。

キリストはもちろん特別な生まれかたをなさいました。けれども、あれはマリヤが特別な人間だからではないですよ。どういう女性だかは知りませんけれども。そんなことを言うと、カトリックではおこられてしまうけれどもね。マリヤという女性が、それはもちろん心の清かった人には相違ないですけれども。

聖霊によって彼は生まれてきた。神の霊はキリストに宿ることを要した。キリストに宿らなければ、私たちは聖霊なんていうことは言えないんです、キリストに宿っている霊でなければ。

旧約における霊は違いますよ、エホバからの直接の

「エホバの霊」

というのは。預言者たちはエホバの霊の力を受けました。受けましたけれども、この新約におけるところのキリストの霊とは違う。これを受けたときとは違う。だから、

「いかなる預言者も、この小さき神の子の方が上だ」

とキリストが言われた。預言者は知らずして、彼らの預言の内容は、キリストを指さしていた。たくさん預言者がいたけれども、それはみんなちょうど、ガリラヤ湖に流れ入るいろんな支流みたいなもので、キリストはいろんな流れが入ってくるガリラヤ湖みたいだ。そういうキリストに宿った霊です。

「この霊はやがて、私が十字架を通って、即ち贖罪をしてから、お前たちに臨むぞ」

という。これはパウロが言っているとおり、

「我々がまだ信じないときに、弱かったときに、罪を犯したときに、既にキリストは私たちのために贖いをなしてくださった」

と、ヘブル書に書いてある。

キリストは十字架でもって贖罪をなさった。それだから今度は、本当に聖霊が臨み得るんです。十字架の贖罪という土台があるから、聖霊が来るんです。聖霊のことは、十字架ぬきにして「聖霊、聖霊」なんて言ってはいかん。十字架と聖霊は絶対に離すわけにいかん。十字架でもって、私そのものは、「旧(ふる)き我」というものは――「旧き我」というやつは、私が死ぬまでいますよ、私の中に――だけれども、そんなものはもう、キリストがやっつけてしまっている。私は二重構造で仕方がないよ、地上にいる限り。けれども、

「新しき我」

という、この聖霊を頂いた私は、これは誰が何と言おうとしょうがないですから。私がどんなにしょうがない野郎でも、

「私の中には聖霊があります」

ということが言えるんです。これは、キリストの十字架の贖いのゆえにですよ、無条件に頂いているわけです。

●無者キリスト

「恵福(さいわい)なるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」

という、山上の垂訓の最初の言葉がある。「霊が貧しい」という。

あれを「垂訓」なんて言うからいかん。あれは

「大告白」

です。キリストは告白していらっしゃる。どんな言葉も全部、彼の内面から迸り出たところの告白なんです。それが教えであろうが、何であろうが。だから本当は全部、告白です。お釈迦さんもそう言ったですよ、

「八万四千の法を教えたけれども、私は一つも教えなかった」

と。なぜ、お釈迦さんはあんなことを言ったか。

「私はただ、言うことを言っているだけの話だ。お前たちは同じような体験をしてくれ」

と、お釈迦さんは言っているんだ。

「恵福なるかな、霊の貧しい者」

とは、キリストが霊が貧しいんです。だから、私は

「無者キリスト」

と申し上げている。

「自分を何ものともしない」

ということです。「無」というと、すぐ虚無だと思う、
「あれはニヒリズムか」
なんて。キリストは自分を何ものともなさらなかった。
「我、何事も為しあたわず」
と仰っているではないですか。「善き先生」と呼ばれたら、
「なぜ、私を善いと言うか。神さまのほかに善いものはない」
と仰ったではないですか。本当に自分を神さまの前に何ものともしないで、平伏していたキリストだから、彼は
「ゼロ＝無限大」
というひとなんです。
「無即無限無量」
のひとなんです。だから、
「我を見し者は父を見しなり」
とはっきり仰った。
「霊の貧しき者、天国はその人のものなり」
と。「霊の貧しい」とは、本当に自分を何ものともしないということ。そうしたら、「天国」は即ち、キリストにとっては「天国」は神さまですよ。
「天国は汝のものなり。天国はわがものなり」
と、そういう言葉であることに気がついた。それで、私はキリストの真似をしようとしたって真似できない。自分で無者になれないから。それで、どうしたかというと、
「恵福なるかな。汝、わが十字架によって無とされた者、我執から取り除かれた者よ」
というわけです。「罪びと」というけれども、罪びとであっても、我執から取り除かれてしまった。
「天国即ち、聖霊の我、汝の中にあり」
と、こう響いてきた。どの註解書にもそんなことは書いてない。上から響いてきたんだから。私は畳の上で平伏した。あの一言がそのように読めたら、聴こえたら、そうしたら、その後のキリストの言葉は全部すらすらと読めるようになってしまった。これは鍵なんです。あの第一言が天国の鍵です。即ち、あの言葉の中に
「十字架と聖霊」
が隠れていたんです。だから、私は人に何と言われようと、「無者キリスト」と申し上げるんです。

●南無キリスト

「南無阿弥陀仏」と言うね。「南無」というのは、帰入すること、帰依すること。また、私は「帰

入」を「祈入」、祈り入ると書きます。「祈る」ということは、全存在をキリストの中に投げ入れることなんです。

それから（自分をキリストの中に投げ入れてから）、何かお願いするのはいいですよ。自分というものをここに（キリストの外に）置いといて、そして何かお願いしたって、それはヘタすると御利益信仰になる。聖意を本当に受けとらないことになる。いつも根源の現実の中にあること――相対現実の中に根源現実というのがある――それが天国なんです。

「天国は汝らの中にあり」

というのは、

「その根源現実がお前たちの中に来ているではないか、私のいる所に、私の霊のあるところに」

と。だから、今の山上の大告白の第一言と、パウロのガラテヤ書2章20節とは同じなんです。

「われキリストと共に十字架せられたり。もはや、われ生くるに非ず

「我生く、されど我にあらず」でも、どっちでもいい。

キリストわが内に在りて生き給うなり」

と。私はキリストと共に十字架されてしまった。即ち、旧き我は――「旧き」というのはただ時間的に言っているのではない。過去的な我。現在にも未来にも旧き我がいます――そういった生まれつきの我は、もはや生きても死んでもどうでもいい。問題は新しい我が本当に生きているかということです。

「もはや我生くるに非ず、キリストわが内に在りて生くるなり」

とは、どういうことですか。キリストは天界にいらっしゃるんだ。御霊のキリストです。キリストの御霊をパウロは、わざわざいちいちそんなことを分析的にものを言わない。

「キリストわが内に在りて」

とパウロが言うときには、

「御霊のキリストが本当に私の中にいてくださる」

ということです。

天にかかっている満月は、たくさんの葉末の露にみんな満月として映ります。一千個の露があったら、千分の一が映るかというと、そうではない。全部、全的に映っている。「田毎の月」というのはそういうことです。皆さん一人びとりにキリストは100％に御霊をもって入って来てくださる。我々一人びとりに。本当に十字架を受けとって、

「あぁ、もう私はどうでもいいよ。現在も過去も未来も、どうなったって構わない。私はもう私ではないんだから。すっ飛んじゃったから」

と。「贖う」というのは、それくらいのところですよ。そうしたら、そこは真空にはなっていない。必ず聖霊がやって来る。だから、本当に十字架を受けとっていれば、祈りの世界で聖霊は来ざるを得ない。

「南無阿弥陀仏」の「阿弥陀（アミダ）」（アミッター）というのは梵語で「無量寿無量光」という意味だそうですね。無量寿無量光とは、永遠の生命と限りなき光です。キリストは、

「我は生命なり。我は光なり」

と言われたではないですか。

「我は生命なり光なり」

というのは「アミッター」なんですよ、キリストは。その中に「南無」すればいい。その中に帰入（祈入）すればいい。「仏」はキリスト、覚者だ。そういうふうに、

「南無阿弥陀仏」

という言葉は、実はキリストのことを表しているんだということに気がついて、私は正直、驚いた。だから、私は

「南無キリスト」

なんて言うんです。「あの変わり者」なんて言われたってしょうがないんだ。

日本人はもっと日本的に――「日本的に」というのはただ色彩をつけろということではない――自然にならなくては。ドイツ人は、ルターはルターらしく、ドイツ人らしくやっている。我々は日本人らしくやればいい。問題は、

「そこに本ものがあるか」

ということだけが問題なんです。「本もの」とは本当の霊です。十字架を通してこのキリストの霊を受ける。あの山上の告白の第一言とガラテヤ書2章20節を本当に深く瞑想して、その中に入ってください。祈り入っていく。自分を投げ入れてください。そのことに気がついてください。

●坐禅和讃

白隠禅師の「坐禅和讃」というのがあるね。あそこに、

「衆生（しゅじょう）本来仏なり」

とある。生きとし生ける私たちは本来、仏である。本来、神の似姿につくられている。

「水と氷の如くにて、水を離れて氷なく、衆生の他に仏なし」

という。素晴らしいね。「衆生の他に仏なし」と。

「仏はどこにあるか。あなた方が仏ではないか」

と、こう言うんです。「キリスト者」とは何ですか。キリストに属（つ）ける者です。これは「仏」じゃないですか、キリスト者というのは。

「水と氷は一つだ」と。神の似姿につくられたが、それがパラダイス・ロスト（楽園喪失）になってしまったから、キリストが仕方がなしに十字架におつきになったわけだ。贖罪です。パラダイス・リゲインド（楽園回復）のためにキリストは十字架で贖罪なさった。本来の場に私たちを戻してくださった。本来の場に十字架を通して戻してくださったんだから、

「これはありがたい」
と言って、本当に無条件に自分をその中に投げ入れなかったら、
「水と氷の如く一つにて」
ということにならない。
一如の世界に入る。いわゆる神秘主義を言っているんじゃないですよ。「神秘」と言うと、プロテスタントはみんな、
「あれはあぶない」
と言って警戒するけれども。宗教が神秘でなかったらどうするんですか。祈りが本当の神秘でなかったら、祈れますか。
「パウロはキリスト神秘である」
と、ダイスマン（アドルフ・ダイスマン 1866～1937）が言っているとおりです。
「衆生の他に仏なし。衆生近きを知らずして、遠く求むるはかなさよ。例えば水の中にいて喝(かつ)を叫ぶが如くなり。」
と。水の中にいながら、「渇(かわ)いている。渇いている」と言うようなものだと。
空気の中にいながら、
「空気はどういうものだろうか」
なんて考えているようなもの。水はH_2Oであることを考えて、喉の渇きがなおりますか。
「空気の構造はどうだ、酸素と窒素はどうだ」
なんてやっていて、空気を吸わなかったらどうなるんですか。私たちは空気に包まれ、空気を眠っていても吸っている。どんな時計も心臓の鼓動にはかなわない。時計は止まるよ。心臓の鼓動は、生命のあるかぎり止まらない。血は刻々に清められている。私たちの肉体にとっては、空気は絶対的な必要存在です。しかも、これは無価値です。誰もお金で空気は買っていない。水は、ときには買わなければならないことがあるけれども。空気は全然、そういうことはない。全然、無価値なるものが無限価値をもっている。
「お前はダイヤモンドと空気のどちらをとるか」
と言われて、ダイヤモンドをとったら死ぬよ。
この部屋の中の空気は有限のようにみえるけれども、これは外界と、無限のところと通じているから、我々は窒息しない。有限にして無限なる姿ではないですか。相対にして絶対なる姿ではないですか。そのようにして、私たちは、肉体は空気を絶対に必要なるところの無限無量なるものとして受けとっている。
しからば、私たちの魂は、霊というならば、この無限無量なるキリストの霊を受けないでどうするんですか。空気は見えませんよ、聖霊も見えませんよ。あるいは、それは風の如く、火の如く、ということが現象的にはあるでしょう。いろいろな表現はしても、中身はみんな同じことです。

●十字架という門

そういうキリストの中へとバプテスマされる。これはロマ書6章によく書いてある。

「3 **なんじら知らぬか、凡そキリスト・イエスに合う**

「キリスト・イエスに合う」とは、「キリストの中へと」ということ、

バプテスマを受けたる我らは、その死の中へとバプテスマを受けた。

即ち、キリストの贖罪のバプテスマです。これは死のバプテスマです。

4 **我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、**

十字架に葬られ、

その死に合せられたり。これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦えら

せられ給いしごとく、我らも新しき生命に歩まんためなり。」（ロマ6・3～4）

という。パウロは聖霊のことを直接ここでは語っていないけれども、復活の生命のことを言っている。我々が甦りの生命になるのは、これは聖霊が来なければ甦りの生命にはならない。復活のキリストをただ思ったってダメですよ。使徒たちは復活のキリストにでっくわして目が醒めたけれども、まだそれではダメなんです、聖霊を受けるまでは。目が醒めて立ち上がったけれども、御霊が来るまではダメでした。

「祈り」というのは即ち、その御霊の中に自分を入れること、御霊を受けること。どう言ってもいいですよ、とにかく、内在関係になることです。

「我キリストの中に、キリストわが中に」

という、パウロが何回も言っているあの言葉。あれは形容詞ではない。

「空気はわがうちに、われ空気のうちに」

と同じことなんです。そのとおりです。「空気」の「気」は今度は、霊気だ。

本当に十字架にぶっ倒れてください。十字架という門です。

「我は門なり」

という。十字架という門に体当たりしてぶっ倒れたら、そうしたら、門が開けるから。そして、その先に行ったら、詩篇23篇みたいな

「緑の野、憩いの水汀」

聖霊の天国的世界になる。キリストの霊気を本当に吸う。御霊はもちろん、あるときは「人格」（ペルゾナ）としてはっきり意識されます。

そういうことで、聖霊の世界は、鍵は十字架をおいてないですから。いいですか。ただもう祈り三昧になって霊的に高揚して、そんなことをやったって、またそんなことで「ワッショイワッショイ」となる。静かに深く十字架を瞑想して、その中に入ると、今度は聖霊の世界に入ってしまう。

「南無キリスト！」

と言って、キリストの中に祈入してしまう。もう、その秘訣を、これを身につけたら、本

当に楽になる。そうして、本当に力が来る。
何をやっても、私はほとんど疲れるということを知らないんです。それは眠くはなるよ。けれども、
「今日は疲れてしまった」
なんて思うことはほとんどない。ありがたいですね。私は74歳になったけれども、これからだよ、私の人生は。あなた方はまだ若いから、御霊の光で姿が見えなくなるよ。永遠の生命が本当に内側から輝くから。いつぶっ仆(たお)れても、「アーメン！　ハレルヤ！」ということとなる。未完成の完成という。未完成交響楽です。

●佐久間象山

どうぞ、若い方は――日本は、入学試験だ何だのと、
「試験、試験」
でもって大騒ぎしている。日本という国は「試験」で滅びてしまうよ――学校なんかやめて、何か自分でおっ始めたらいい。ちょっと乱暴なことを言いましたが。それくらいの気魄があっていいよね。
私は実はこないだ――私の母の故里は松代なのでね――松代へ行って、佐久間象山の記念館を見学しておったまげた。
「こんな人だったか、大変な人だなぁ」
と。日本のダビンチみたいな人だ。何でもできる。そして、それでもうその方面で一流です。また自分で考案してしまう。望遠鏡や写真機なんか作ったり。彼自身の写真があるんですよ。幕末の時の先駆者だよね。吉田松陰、高杉晋作、その他有名な人たちが象山に師事した。尊皇攘夷論者に殺されてしまったけれども、惜しいことをした。日本の損失です。
象山は何と言ったかというと、
「余(よ)、年二十以後、乃(すなわ)ち匹夫(ひっぷ)も、一国に繋(かかわ)りあるを知る。
二十を越えると、このつまらない自分も一国に――「一国」というのは松代の郷土のことをいう――係わりあるを知る。
三十以後、乃ち天下に繋りあるを知る。
三十を越えたら、自分は日本全国に係わりある存在であることを知る。
四十以後、乃ち五世界に繋りあるを知る。」
四十を越えたら、全世界に自分は係わりある存在であることを自覚したという。
これだけの気魄をもって彼は生きていた。そして本当にどの方面でも彼は一流で、望遠鏡を作ったり、医薬も作ったりした。奥さんがコレラか何かに罹ったのを治してしまった。奥さんは弟子の勝海舟の妹です。オランダからもの凄い本を買ってね、字引と本を。それを自分で一生懸命で読んでしまった。それで、砲術も海軍や陸軍のこともみな学んでしまっ

た。本当に真理に燃えていたような人だね。私は本当にあの記念館に行って、おったまげたな。こんな人だったかと。ある程度は聞いていたけれども。若い人はぜひ、信州に行ったら、松代のあの象山の所を訪ねてみてください。そして、

「よし、俺もやってやろう」

と。象山の一端を担ぐような気持でやってください。

●御霊の力

御霊の力が来ればできるんですよ。一人びとりが神さまからみんな使命をおびた存在なんです。人にどう思われようといい。どこでぶっ仆れてもいい。本当にその気魄でもって、一日を本当に生きれば、いい加減に百年生きるよりか本ものなんです。

キリストは本当に神さまに生きていました。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を我々は読んで、本当にキリストに捕(つか)まえられ、ぶっ倒されて、

「いやぁもう、キリストはたまらないな」

と言ってしがみつく。そうしたらもう、それは聖霊の世界ですよ。ちっとも難しくない。聖書ほど易しい本はないんです。こんな楽しい本はない。

毎日変わるような新聞なんかよしたらいい。聖書は変わらないんだ。新聞を読んで、どうなったこうなった、すったもんだでもって、人生はお終いだよ。テレビだってそうだよな。

「テレビを見るな」

なんて言わない。私は時代劇の「座頭市」なんか好きだから、見ているんだ（笑）。何を見ても、その中から真理をつかみだすことができる。この聖書の、キリストの霊が来ているから。そういう目で見るから、とらわれないで相手を逆にとらえてしまう。非常に創造的なんだ。神さまは創造の神さまですから。模倣の神さまではないんだ。

私は第二巻に『芸術のたましい』を書きましたが、あれはただ芸術のことを言っているのではない。最大の芸術家は神さまですから。この頃のクリスチャンは考えが狭すぎる。キリストという方はもっと雄大な、宇宙的なんです。たとえば、パウロのエペソ書なんか開いてごらんなさい。エペソ、コロサイあたりは、そんなところだから。

ゲーテやダンテのような、第一流の人物は――ただ世界的に偉いとか何とか言っているのではない――質的に第一流の人物はみな霊的なんです。皆さんも、質的に第一流の人物になれるんです。

「**一人びとりは全世界とも代えることができない**」

と、キリストが言われたでしょ。

「**その生命を失わば、全世界を得るとも何の益かあらんや**」

という。一人びとりは全世界にも比較できない存在なんだ。ちょっと平面論理では成り立たない言葉です。そういう逆説の中に真理というのはあるんです。

聖霊の世界で、この聖書の活ける文字を読んで、あなた方自身が活ける文字となる。あのパウロがそう言ったでしょ、

「キリストの文字だ」

と。「活字」というのは、活ける文字です。あなた方自身が「活字」なんです。神さまの、キリストの活字にならなくては。何も本を書かなくたっていい。天界にあなた方の生涯がちゃんと映っているから。それだけの抱負をもって、希望をもってください。どうせ、地上の生涯は、いくら長くたって百年ですよ。これは序曲にすぎない。

「永遠の世界、神さまの最後の新天新地は、ああ、もの凄いなぁ」

と、黙示録の最後のところを夢見ながら、いや現実に見ながら、進んで行く。本当ですよ。黙示録が最後にあるというのは本当に何とも言えないです。これは大希望です。

というのは、

「聖国を来たらせ給え」

と祈るでしょ。これは聖国が来ているから祈れるんですよ。聖国が来ていなかったら祈れないです。聖霊は聖国の双葉（ふたば）だから、聖霊の現じる現実は。

●聖霊が来ているか

そういうことで、本ものの世界に入って、こしらえごとでない偽りでないところを歩いて行きたい。クリスチャンほど生きのいいものはないはずなんです。それを、くすぶったような顔をしていたらしょうがない。どんなことに出っくわしても、出っくわせば出っくわすほど、逆に力が来る。これはペテロもパウロも言っているとおりです。彼らがなぜあんなに力があって、牢屋に閉じ込められても、

「喜べ、喜べ」

なんて手紙を書いているか。

「神の言葉は繋（つな）がれていないぞ。私は身体は鎖に繋（つな）がれていても、魂はもう天翔（あまがけ）っているぞ」

というのが、パウロ、ペテロ、ヨハネです。

「パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん。楽しいですね」

と、天界にあなた方はひとつ、キリストを通して呼んでくださいよ。

「パウロは偉大な人だから、そう簡単には……」

なんて、そうじゃないよ。

「なぜ、お前たちは『パウロだ、アポロだ、ペテロだ』なんて言っているか。キリストだけではないか」

と、パウロ自身も言っているんだ。どうぞ、突き抜けてくださいよ、本当に。

「自分の信仰」

なんてことは思わない方がいい。

「私はまだ信仰が薄いから、これからもう少し聖書を勉強しなくては」

なんて、そんな必要はないんですよ。自(おの)ずから読まざるを得ない。自ずから人を本当に愛せざるを得ない。キリストの生命が溢れてくれば、それを分かたざるを得ない。

だから、私みたいなやつを通しても、幾人も私は人助けをしてしまった。使徒行伝みたいに。カリエスが治ってしまったり、心臓が治ったりするもの。何も私は御利益を言っているんじゃない。神さまの栄光がそういうように表れる。

私は無教会にいて、内村鑑三先生のグループにいたんだよな。けれども、無教会が――あの無と違うんだよ、私の言っている無は――「教会」対「無教会」なんて、対立しているうちはダメですよ。形の無いのがいいのでも悪いのでもない。問題は、どういう在り方であろうと、

「そこに聖霊が来ているかどうか」

ということだけが問題である。カトリックだって、プロテスタントだっていいですよ。ザビエルなんていう伝道者をみてください。彼は日本語がわからなくたって、彼の言葉の響きで撃たれてしまうんです、みんな。だから、あれだけの伝道を彼はした。本当に聖霊の器だから。ルーベンスがザビエルを通して神の力が現れているすさまじい絵を書いています。

もう、今までの有り来たりの概念を突破して――註解書なんか要らんです――聖書そのものに食いついていく。そして、

「あぁ、こんな本だったか」

と。私は御霊を受けてから、聖書を読んだら、

「こんなに聖霊のことが書いてあったか」

と、びっくりした。

「今まで何を読んでいたのか」

と思った。マルチン・ルターが

「神の言」

ということを大いに言った。けれども、彼は「神の言」を「霊」とは離していなかったんだ。そのことに、シュレッダーという人が新しく気がついて、いい本を書いていますけれども。

●一如の世界

エペソ書４章３節に、

「[3]**平和の繋(つなぎ)のうちに勉(つと)めて御霊の賜う一致を守れ。**

とある。「平和」という言葉は時々――ここはまぁ、「平和」でもいいけれども――「平和」というより「平安」という言葉の方が大事なんです。

「神・キリスト・我」の関係が本当に立っていることを「平安」という。しかもそれは、ただ縦じゃないですよ。円還関係です。三つの円（三重丸）が内接している。「神・キリスト・我」の内在関係になっているのが本当の世界ですから。旧約では「共に」という。

「神と共に」「われ汝と共に」

という言葉が多い。新約になると、「中に」という言葉が出てくる。本当の「中に」というのは、聖霊が来てからでないと言えない。そこに本当の平安がある。そうすれば、人と人との間に平和が自ずから成ってくる。平和どころじゃない。喜びの世界が展開してくる。だから、喜びの音信という。いくら平和運動をやったってダメですよ、福音のないところには。

まぁ、キリスト教が嫌いな人は仏教でもいいよ。そのかわり、本ものになってもらいたい。私は一流の坊さんには敬意を表するよ。親鸞の「歎異鈔」なんて本当に素晴らしい本ですよ。

4体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望をもて召されたるが如し。5主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、6凡ての者の父なる神は一つなり。」（エペソ4・3～6）

「一つ、一つ、一つ」とそこに書いてある。

「神は凡てのものの上に超在し、凡てのものに貫在し、凡てのものの内に内在している。」

と書いてある。こういう言葉があると、

「これは汎神論だ」

なんて、馬鹿げたことを言うやつがある。御霊の世界は、超在、貫在、内在、遍在、自由自在です。そんな概念で分析するような世界ではない。一如の世界から無限に展開してくるんです。だから、

「一つ、一つ、一つ」

というのは、

「本当に一如の世界に入れよ。一如となれよ」

ということです。それは本当に自分がキリストのように無者になっていく。無者にされているんです。十字架上で私は無者にされているから、聖霊で無限無量者にされているんです。質的にですよ。今は相対的存在だから、量的になんかいきませんよ。質的にそうなんです。

皆さんは、私のこんな乱暴な話をお聞きになりながら、何だか知らんけれども楽しくなりましたか。そうしたら、本ものです。

「まだ、どうにも……」

なんていうのは、まだ頭で聞いていると、「まだ、どうにも……」だ。そんな方はいらっしゃらないと思いますけれども。

「よし、それなら、私はひとつそれで行こう。聖書はもったいぶった本ではなかった。

これはドラマだ。神さまのドラマの中に入って、ひとつ行きましょう」と。そうしたら、福音書を破りとって、ポケットにでも入れて、いつどこででも読んでくださいよ。

パウロが

「**われ神のためには狂えるなり**」

と言ったけれども、あの「狂えるなり」という言葉は本当の「気違い」ではない。

「**狂えるがごとくに、我らは神の言葉に酔っている**」

と。これはちょうど、

「**酒に酔える人の如し。神の言が火の燃えつくようになって、これはどうにもならん。黙すに耐え難し**」

とエレミヤが言った。みんな彼らは本当の世界に、そこに一つになって、一如になって燃えているから。水の如く流れ、火の如く燃え立ち、風の如く吹き去らし、大地の如くに一切を担ってしまう。天空の如くに一切を被ってしまう。地水火風天空なんていうのはみんな、私たちの全存在が地水火風空なんです。空は天ですよ。仏教のあんな言葉だって、福音を本当につかめば、何ということはない。全部、つかんでしまう。これは本当にキリストという方はそういう方だから。キリストという方は本当にそのようにして、一つになっておられる。どうせ、私たちは罪びとですよ。罪びとだけれども、絶対恩寵の一の世界に入っている。恩寵の世界に。

何となくうれしくなってきましたか。「聖霊のバプテスマ」と言ったって、何も難しいことはない。そういうことです。

「南無キリスト」

で、キリストの中に祈入する。

●また来る朝も食うキリスト

「南無阿弥陀、餓じくもなし歳の暮、また来る春も食う念仏」

という面白い句がある。木喰上人の歌です。やれ今は、食糧がどうだこうだとすぐ要求したり、耐え忍ぶこともしないで、そんなことをいつまでやったって、どの政府がきたってダメです。問題は、我々一人びとりの心の問題なんです。どのような政治の問題も、経済の問題も、教育の問題も全部、心の問題。魂の問題です。

そのようなキリストの霊が本当に一人びとりに不滅の炎となって、不尽の水となって、流れまた燃えるときには、もう怖いものはないです。また、本当に人を活かしていく。人を燃やしていく、人を潤していく。

クリスチャンというならば、そうならなかったら、つまらないですよ。私は本当にそのようにされて来たから。そうしたら、無教会の人たちが、

「小池はおかしくなった」
と、アウトサイダーにした。ところが、私はパウロさん、ペテロさんのインサイダーになってしまったから、楽しくてしょうがない。孤軍でも天に万軍がいる。本当ですよ。だから、
「南無阿弥陀、饑じくもなしこの日暮、また来る朝も食うキリスト」
でいいじゃないですか。
「南無阿弥陀
というのはキリストのことだ。アミッター、無量寿無量光の中に祈入しましょう。

●饑じくもなしこの日暮れ

「我乏しきことなし詩篇23篇の如しまた来る朝も食らうキリスト」
キリストを食べる。御霊のキリストを食べれば、もう空腹も忘れてしまう。水だけでたくさんだ。空気だけでたくさんだ。それくらいの気魄の人間にならなかったらダメです。すぐ経済問題で何のかんのと。
「武士は食わねど高楊枝」
なんていう言葉があるけれども。昔の坊さんはそういう心境に如来の世界で入ってました。だから、私は本当に尊敬する。良寛和尚でもそうだ。道元でも。禅宗であろうと、日蓮宗であろうと、何であろうと。
本当の世界では、法然が水が出ない所に行って、手を置いたら、そこからきれいな水が迸ったという。あれはうそではないですよ、ああいうことは。本当なんですよ。日蓮は龍の口で斬られようとしたら、
「南無妙法蓮華経！」
と言えば、斬ろうとしたやつがぶっ倒れる。本当ですよ、これは。使徒行伝でもって、鎖が切れてしまったではないですか。
私たちは現象を追うのではない。本当の世界に来れば、神さまは自在に現象も起こし給う。何をしていても、老若男女をとわず、事柄をとわず、そこに本当に神の栄光が現れる。聖名を讃えるだけです。

●福音書は生きものだ

ナポレオンがセントヘレナに流されて、そして、彼はやっと聖書をひもといた。
「福音書には不思議な力がある。言うに言われぬ作用がある。心を魅すると同時に、理性にもうったえるある暖かさがある。福音書の内容に深く思いをひそめると、まるで天空でも眺めているときのような気持になる。福音書は書物ではない。行動能力を備えた生きものである。そして、その普及に反対するすべての者をひきさらっていく力さえ持っている。この書は特にこの私の机の上に置かれてある。私は繰り返しこれを

読んでうまないであろう。毎日、私は同じ喜びをもってこれを読む。

やっとナポレオンは最後にこのことに気がついた。福音書が生きものだということに。さすがはナポレオンだよな。

キリストは語る。かくして、もろもろの世代は血の絆（きずな）よりも更に緊密な、更に深く心こまやかなる絆（きずな）によって彼に属するのである。彼は愛の炎を燃え立たせる。これによって何よりも強力な自己、自愛は打ち砕かれるのである。

何よりも強力な自己心、自愛というものが打ち滅ぼされてしまう。キリストの愛の力で。

我々は彼のこうした奇蹟からこの世の創造的な言葉を読み取らずにはおられない。キリストの最大の奇蹟は、疑うべくもなく、こうした愛の国である。あらゆる時間的な限定をうち破って人間の心を目に見えないものへと高め、かくして、天と地との間に不壊（ふえ）不滅の絆をつくることができたのは一人キリストのみである。なぜなら、率直にキリストを信ずる者はすべてこうした不思議な愛、自然を超越する高次の愛、単なる人間の悟性をもってしてはいかんともしがたい現象である、こうした不思議な愛を感ずるからである。それはこの新しいプロメテウスによって地上にもたらされた聖なる神秘であって、偉大な破壊者である時間でさえも、それを消すことはできない。全世界で愛され、畏敬され、伝道されているこのキリストの永遠に生ける国と、この私のひどいみじめさとは本当に何という違いであろうか。」

もう、彼はキリストの前に降参しました。

そのイエスが本当に神を生きたひとです。神の生命を自分の生命としている。私たちは本当にキリストの生命を、霊を頂いて、その一如の歩き方を、躓いても転んでも滑っても前進あるのみで、展開して行こうではないですか。

この日本の国は四方八方破れで、あるいは四方八方塞がりで、希望はどこにもない。天界から希望は来ます。希望とは上から来るんです。私たち自身が希望体となり、信仰体となり、愛体となる。信望愛という。これはキリストがすべてそれをする。キリストは私たちの希望そのもの、愛の現実そのもの、信そのもの。私たちの側が何ものでもないことになったら、もの凄いことになりますから。こんな楽しいことはないですから。もう

「自分の信仰が……、聖書研究がどうの」

と、そんなことはよしましょうや。

「研究会をよせ」

と言っているのではないですよ。

「その精神を本当に新しくしようではないですか」

と言うことです。そうしたらば、皆さんはもう、

「何と福音とはもの凄いものだろう」

ということになりますから。聖名を讃えます。